

インタビュー

挑む

清宮克幸

Katsuyuki Kiyomiya

サントリーラグビー部サンゴリアス監督

人とは適当に距離を置く。
暑苦しいところは見せたくないし見たくない。
斜に構えることがかっこいいと思われがちな昨今、
熱く夢を語り、それを実現させてきた
サントリーラグビー部監督・清宮克幸氏。
率いるチームを必ず強くしてきた清宮氏に、
「挑む」ことの大切さを伺った。

取材・文千葉 望 写真 栗原克巳

東京都府中市にあるサントリー・ラグビー部サンゴリアスのグラウンドにある、ラグーマンの誇りがこめられたモニュメント。



強い一体感が彼らを号泣させた

五年前、弱かった早稲田大学ラグビー部の監督に就任する前、清宮氏は学生にいちど拒絶されたのだという。それなら就任時に自分が目指すモノをはっきり示さなくてはならないと、清宮氏は学生に「ラグビーを通じて社会に希望を与える」というミッションを掲げた。最初は驚いていた学生たちは、勝つことを通じて勝利の先に求められる「ノーブレス・オブリージ」の精神を獲得していったという。高い目標に挑むことよって、より高い人格に至るその道のりには、現代の冷めた空気を吹き飛ばす勢いがある。ラグビーを通じてラグビーを超えた清宮氏の姿はさわやかに満ちていた。

今、組織を運営している人の多くは、若い人だけではなく中間管理職も含めて一体感が薄れているという実感を持っているようです。清宮さんはどのようにお考えでしょうか。

清宮 おそらく、一体感を持って何かを成し遂げたという経験を持つ人が減っているのではないのでしょうか。最近では、チームワークの素晴らしさや、仲間たちから勇気をもらった体験をしていない子供たちが増えていますね。

僕自身、高校から早稲田に入学してラグビ

一部に入ったとき、大きな試合の前になると四年生がみんな泣いていることを、最初は不思議に思っていました。「ここで死んでもいい！」とか「(出場できない)おまえらのために俺はやってくる！」と叫んでいる姿を見て、一年生は「俺、あんなクサイこと言えないよ」と内心思う。結局、何も分かっていないからです。ところが同じ人間が二年、三年と成長し、最終学年になったとき、「以前の自分があんなふうに感じていたことが本当に恥ずかしい」と思えるようになるんです。

要は、最後のところで、「こいつらのために俺は体を張れる」

と思えるかどうか。仲間の力を一つにして結果を出す尊さをラグビーは理解させる力があるということですね。日本一になったときだけに歌う「荒ぶる」という歌は、早稲田の日本一を象徴する言葉でもありますが、部員みんなで勝ち取ったものだという実感がこもっているから感動できるんです。

でも、こういう気風があるのは一部のチームだけになりつつあるのではないのでしょうか。やはり伝統あるチームにこういう感覚は多いですね。社会人チームでもあるところとないところ、さまざまです。

最近ほどのスポーツでも「試合を楽しむ」と言う選手が増えていますね。日本代表でも。

清宮 僕は「自由」とか「エンジョイ」という言葉は必要だと思っっているんです。そういう言葉は、ちょっと高かにかかっている感じがあっていやですね。素直になれないだけじゃないかな。本当は仲間と競い合って勝ち取ったポジションで、「俺がお前たちの分までやってくる」と

いう思いがあつて当然だし、涙が出るのも当たり前はずですよ。まあ、ほかのスポーツだと分かりにくいかもしれませんが、ラグビーはタックルがありますから。タックルして相手を止めていいというところに、一番メンタルが発揮されるんです。

毎年一年生が入ってきたとき、その部分はどやって鍛えるんでしょうか。

清宮 早稲田のあるべき姿、早稲田なら絶対にやってはいけないこと、負けてはならないことなどを心身にしみ込ませる。分からないなら本当に踏みしめてでも分らせることから入るんです。最初は理解できないと思っっている一年生も、伝統校との定期戦などを乗り越えていくうちに自然に身につけていきます。やっぱり、ビッグゲームを体験することが一番大きなきっかけとなりますね。特に早明戦や早慶戦などを、プレーヤーではなく試合に出られない部員として観るのはすごい経験です。何万人もの声援が飛ぶ中で、「俺だつて頑張ればあの舞台に立てる」と思っ瞬間ですから。

勝つことで世の中を変えられる

清宮さんは現役時代中心選手として活躍されました。



クラブハウスには世界のラグビーチームのユニフォームが飾られている。国の代表戦(テストマッチ)で交換したものが多し。

清宮 二年生のときは大学ナンバーワンで、社会人チームにも勝って日本一になりました。四年生でキャプテンのときも大学ナンバーワンになっています。

しかしそれ以後、大学チャンピオンの地位からも遠ざかっていきました。僕が監督になる前の年もベスト8で敗退。いつもそんなところにいました。そこで監督就任の際には「すべてを変える」と学生にプレゼンテーションの最初の一枚にはチーム・ミッションを書きました。「ラグビーを通して人々に夢や希望を与えること」

これを見た学生たちは「なんだそれ？」という表情でした。自分たちは勝ちたいのに、と。二枚目からはなぜ勝てないか、勝つために何が必要かという具論に移っていききましたが。

最初はいぶかしく思った学生たちは変わりましたか？

清宮 変わりましたね。僕が監督を務めていた五年のうちに勝つことを経験して、「勝つことは当たり前なのだ、それよりも俺たちは勝つことで世の中を変えられるんだ」と口にするようになっていきました。

負け続けていた頃は、「それでも勝ちたい」という気持ちが薄れることはなかったのですか。

清宮 勝とうという気持ちは高

きよみや・かつゆき 1967年大阪生まれ。府立茨田高校を経て早稲田大学に入学。高校・大学・社会人チームでキャプテンを務める。ポジションはフランカー。01年に現役を引退後、早稲田大学ラグビー部でフルタイムの監督を務め、常勝チームに育て上げた。06年2月の日本選手権で18年ぶりに学生が社会人チームを破る快挙を成し遂げ、勇退。サントリーラグビー部の監督に転身したばかり。著書に『「荒ぶる」復活』『究極の勝利 ULTIMATE CRUSH』『最強のコーチング』(以上講談社)など。

レベルで持っていました。それがすごいところかもしれない。やはり「荒ぶる」という精神の大きさ、強さでしょう。就任後

僕は従来のバックスのオープン攻撃重視のスタイルを壊すことから始めました。勝てない頃のチーム作りは「早稲田はこうだ」というスタイルを大事にすぎた。大切なのは選手たちがいっぱい持っている力を一番発揮できるかたちにしていくこと。

一例を挙げると、今年早稲田からサントリーに入った前田航平君という選手がいるんですが、彼は高校時代バスケットをやっていた身長一八三センチ、八五キロで入学しました。昔の早稲田なら四年生でも同じ体重ですよ。でも僕は彼の骨格を見て、一〇五キロ、一一〇キロにもなれると思っていました。そこで一番プロップで育てることに決め、徹底して体を大きくすることを求めました。トレーニング、食事。その結果多少走力は落ちましたけれど、スクラムで負けないプロップが誕生し、四年で初めてレギュラーになったんで

す。昔のスタイルの指導者であれば、彼を日本代表まで育てることはできなかったでしょう。

清宮さんはラグビーで勝つということだけでなく、社会を変えるとき、夢を与えるという発想をなせる力はどこから出てきたのでしょうか。また、それをどのように組織に伝えたのでしょうか。

清宮 ひとつには、ラグビーに関わっている人の多くが、この競技の素晴らしさを伝えたいという気持ちをどこかで持っているということですね。僕自身、早稲田で学生チャンピオンになったとき、日本一になったとき、サントリーが日本一になったとき、どれだけ世の中を動かしたか、周りの人と一緒に泣いたのか、ということを思い出します。そういう成功体験をもっともつと伝えたい。僕自身今年の初めにトヨタに勝ったとき、社会人に学生が勝つなんて不可能だと言われていたことを五年目で可能にし、世の中の人に希望を与えられたということを実感しました。すごい反響でしたから。





右 / 試合前にスコアボードに映し出された奥さんの笑顔。左 / 大学日本一をつかんだ早稲田大学ラグビー部（共に清宮克幸氏著『究極の勝利』より）。下 / ラグビー教室で子供たちを指導（写真提供：日刊スポーツ新聞社）

「じゅんたくれ」が監督になるまで

清宮さんは中学の頃、なかなかのワルだったと伺っています。ラグビーと出会うことによって変わられたんですね。

清宮 僕は小学四年までは野球少年でした。だけど当時のコーチと喧嘩をし、ユニフォームをコーチの家にバーンと投げたまま退部しました。何か子供心に許せないことがあったんでしょね。ところがエネルギーの持つて行き場がなくて、喧嘩ばかりするようになるんです。中学の頃なんて、よく警察のお世話になっていました（笑）。もちろん集団でひとりをしめるとか、弱い相手をやっつけることはし

ませんよ。一対一の素手の喧嘩です。ひと言で言えば「ごんたくれ」。当時はうちの親なんて、近所中から白い目で見られていたと思いますよ。だけど高校でラグビーをするようになって変わっていくわけです。

エネルギーが今度は別のものに転換されて……。

清宮 親が野球を続けさせようとしたら、きつと僕はやっていけたと思うんですよ。だけど両親は、いつも子供判を優先させてくれました。その後何をやるにしても、僕は自分で決断しています。もちろん進路も。そういうときにはスポーツだけじゃない、僕のいろんな経験が体内に詰まっていたからこそ決断ができたんだと思います。要所要所で先生をはじめ、いい方にも出会いましたし。

ラグビーを通じて、人格が高められたところもありましたでしょうね。ラグーマンは結束が強くて、世界中どこへ行っても

ラグビーをやっていたというだけで、すぐ仲間に入れてもらえるとも聞きます。

清宮 ラグビーをやっていたというだけで、国を越えた同志なんですよ。亡くなった大西鐵之祐さん（ラグビー日本代表元監督、日本ラグビーの発展に尽くした）は、戦争で捕虜になったとき、ラグビー選手だったというだけで特別な扱いを受けたそうです。捕えている側と捕えられている側の垣根が一瞬でなくなってしまう。それがラグビーです。

ラグビーというスポーツは肉体

奥克彦さんの遺志を継ぐために

ラグビーは、イギリス紳士を養成するパブリックスクールで盛んなスポーツと聞いたことがあります。

清宮 ラグビーには「ノーブルス・オブリージュ」の精神があるのだと見なされるからではないでしょうか。僕も学生によく自分たちの立場に応じた義務や責任を果たすことが大切なんだと言ってきました。それを体現

でぶつかり合いますし、反則しようと思えば汚いことなんかいくらでもできます。けどしない。厳格なフェアの精神があるからです。サッカーではシミュレーションがあったり、大げさに痛がったりしますが、あんなことをしたらバカにされるでしょう。ひとつの倫理観、ひとつの価値観が共有されるところが素晴らしい。そういうラグビーのよさをもっと僕たちが発信しなければいけませんね。イギリスの学校ではラグビーチームがあることを誇りにしているんですよ。

していたのは、ラグビー部OBの奥克彦さんでした。奥さんは外交官としてイラクに赴任し、思いがけない事件で命を落とされました。僕にとって本当に大切な先輩です。奥さんを失ったことは僕にとって深い悲しみでしたが、体を張ってでも自分の意志を貫き、守るべきものを守るうとした人の尊い志をなんとかして引き継ぎたいと、「奥・井

サントリーのグラウンド上で談笑する清宮氏と日本銀行情報サービス局長・湯本崇雄。まずは社会人日本一が目標となる。



ノ上イラク子ども基金」を設立しました。

奥さんの精神は、ラグビーによって培われたものですか。

清宮 以前から持っていたものにラグビー精神が加わったのだと思いますね。ラグビーをやった人間は困難から逃げないものだと僕は信じています。先日も今僕が監督を務めているサントリー・サンゴリアスのメンバー五九名が富士山に登頂しました。全員登頂を果たして八合目まで降りてきたら、足を骨折した男性がいたのです。ナビゲーターとして同行してくださいっていた三浦豪太さん(プロスキーヤー)が急ごしらえの担架をつくり、メンバーが交代で担いで降りてきました。きつい下山のときでも彼らは逃げなかった。それが「ノープレス・オブリージュ」だ

と思います。

早稲田大学が唯一公認しているNPO法人「WASEDA CLUB」の設立や運営にもかかわっていらっしゃいます。

清宮 大学が持っている施設や人材などの資産を有効に使い、社会に根付いて新しいスポーツ文化を作り上げることが目標に設立しました。「僕はWASEDA CLUBでラグビーを始めたいんだ」「私はフエンシングを始めたいんだよ」という子どもたちがたくさん出てほしい。その子どもたちが一〇年、二〇年たつて、日本代表になるような下支えができれば素晴らしいでしょう。ポートだってもう五〇〜六〇人いるんですよ。サッカーでは先日FC東京のユースに勝ちましたよ。彼らは早稲田の学生に教わっているわけですが、学生も大きな刺激を受けています。今は同じスポーツを親子二代にわたって熱心にやっている人が多いんですが、自然発生的に一流のスポーツ選手が出られるような土壌を僕たちが提供できたら素晴らしいでしょう?

いずれは日本代表監督を

サッカーワールドカップで日本が惨敗したのも、フィジカルの問題が大きかったといわれていますね。肉体がぶつかりあうラグビーでは、さらに体格差がモノをいうと思います。日本ラグビーは世界と戦えますか。

清宮 僕が早稲田の監督になったときの学生と社会人の力の差と、今の日本と世界の差は似たようなものです。確かに困難ではあります。それを克服していくのが面白いんじゃないですか。今、世界が強化していることを真似するだけでも日本は相当強くなります。まだそこができていないんです。

社会に夢を与えるという清宮さんの大目標は素晴らしいですが、具体的には精神論だけではなく確かな戦略が必要ですね。

清宮 そうです。僕はいずれ日本代表監督をやってみたいと思っていますが、まずサンゴリアスで実績を出せなければ笑われるだけ。だから、ここ一二年

が勝負だと思っています。

僕はいつも、自分が思ったとおりのことを口にするんです。自分なりのプランや夢をはつきり言う。すると、それを実現する仲間が周りに集まってくる。そんなイメージですね。合わない人は遠ざかって行くかもしれないけれど、それは仕方ない。だけど、真意を受けとめてくれる人はたくさんいます。例えば僕は、本の中で明治ラグビーを叱咤しつたしているんです。問題提起して、明治OBに嫌な顔をされても仕方ないと思って。ところが反応は逆でした。自分たちの言いたいことを代わりに言うてくれたとあって、感謝されました。これからも言いたいことははっきり言いつつもりです。

近いうちに、テストマッチ(代表戦)で日本代表監督を務めるお姿を拝見したいですね。どうもありがとうございます。

聞き手/日本銀行情報サービス局長

湯本崇雄